

4) ヤマシャクヤクとイトバシャクヤク＝山芍薬と糸葉芍薬

ヤマシャクヤクはボタン科ボタン属に分類されている。世界には50種類ほどあって主に北半球の温帯地方に分布する。この花は広葉樹林の下草を形成し、石灰岩地を好むようで、そのためか根は太くて横に這う傾向がある。花はウケザキオオヤマレンゲにもよく似て、4~5cmの白い花を一つ着ける。花が終わって秋になるとこの実は、赤く熟してなかなか美しい。赤い袋の中には黒い種子があり、これを蒔いておけば殖やすこともできる。関東中部以西の四国、九州に自生するものの、花と実の美しさゆえに乱獲がたり、激減してしまった植物の一つである。

この花を育てるには鹿沼土は好ましくない。鹿沼土はどちらかというと酸性の土だからである。川砂であるとか小石をハンマーで細かく砕いたものを用いて、ときおり石灰をまいて弱アルカリ性を保ってあげるようにしたい。肥料分としては腐葉土が一番だが、堆肥もしくはよく発酵させた油粕でもよく、午前中は陽が当たり、午後は陰るようなところがよい。苗の入手は容易ではないが、連休のころ山麓の土産物屋さんを覗いてみると売られていることもあり、時には桃花種を見ることもある。あとは通信販売で求めるとか、農協の直売所で買うとか、ほかの野草類と同じ苦労が伴う。1株1,000円ぐらいで山野草の中では比較的高価な部類に属する。

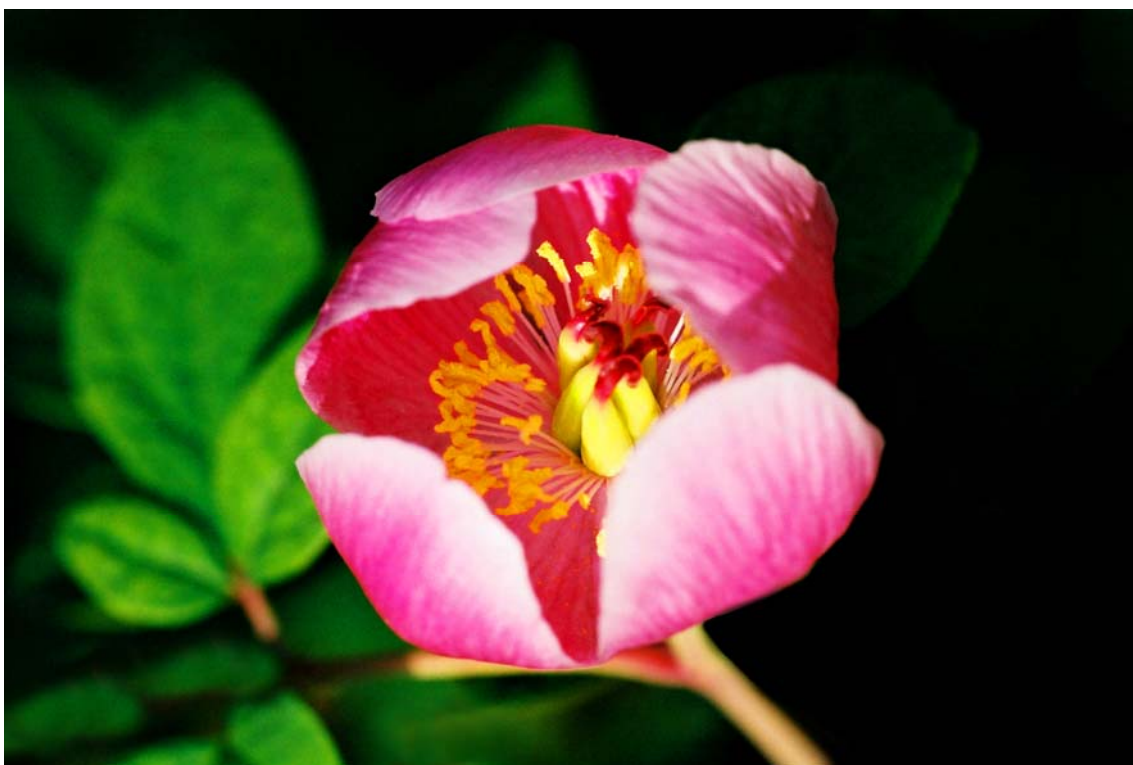
一方イトバシャクヤクはヤマシャクヤクと同様に芍薬の原種の一つである。福寿草のように切れ込みが多く入った特徴のある葉に、5月頃直径6~8cmぐらいの真紅の花を咲かせる。いかにも妖艶で、一瞬なんの花かとわが目を疑ってしまうほどに華麗である。花弁は8枚ほどで、重なりが深く八重咲きのように見える。また花全体がお椀のように丸みがあって豊満な感じである。花芯は大きくこれがまた鮮やかな黄色で、その妖艶さを一層のこと印象深いものにしてている。しかし値段の方もなかなか高価で1株1,500円ぐらいする。しかしこちらの方は土産物屋さんには置いてない。むしろ最近園芸に力を入れている『ホームセンター』だとか、山野草などのカタログを出している通信販売の業者だとか、専門店などで手に入れることができる。

イトバシャクヤクは花が終わってからでも、切れ込みのある葉や全体の姿が十分に美しいので、庭の下草として植えておいてもそれなりの価値がある。しかし陽当たりの良いところを好むのと、暑さには敏感なので、条件に合ったスペースが見つからないときには諦めたほうが良い。また湿り気の多いところでは、土盛りして水はけをよくしてあげなければならない。肥料としては油粕が一番であるが、植えるときには十分に発酵した堆肥などをすきこんでおくようにする。花後にはお礼肥えとして化成肥料を少々与えておけば、翌年また妖艶な美しい花を咲かせてくれる。

ヤマシャクヤクやイトバシャクヤクを殖やすとなると、時間をかけて株分けするか種子から育てるしかない。しかし播種してから発芽するまでに2年、花が咲くまでにさらに3~4年かかる。そんな花だからこそ価値があるということもできようか。



ヤマシャクヤクの花。ベニバナヤマシャクヤクがほぼ全国の山野に自生するのに対して、ヤマシャクヤクは本州の関東中部以西と九州の山野に自生する(栽培品)。



紅花ヤマシャクヤクの花、寒さに強い花だが、過湿と西陽には弱い(栽培品)。



紅花ヤマシャクヤク、咲き出してから3日目には花は散り始める。短い命である。しかし秋になってはじけた種子もまた美しく、ひと時を楽しませてくれる(さいたま市浦和区)。



紅花ヤマシャクヤクの種子。青黒く光ったのが種子である。種子は確実に発芽するようだが、花が咲くまでには5年ぐらいかかる。自然との付き合いには辛抱が肝心である。



ベニバナヤマシャクヤクを播種すると、翌年か翌々年、こんな三つ葉の芽が顔を出す。その翌年はこの葉がやや大きくなるものの、見た目は同様である。



3~4年はこんな葉で、少しずつ背丈を伸ばしてゆくものの、見た目はあまり変化がない。そして5~6年目には丈が40cmほどに生育して、花を咲かせる。



朱赤色が輝くばかりのイトバシヤクヤクの花(栽培品)。

[目次に戻る](#)